

組織における役割分担の経時変化という考え方がある。成長途上の若い組織の場合は、各自が「自分がやって当たり前」ということが多く、お互いの役割が重なり合うが、経年により各自が「相手がやるはず、誰かがやるはず」と思うことが増え、役割と役割の間に「隙間」、すなわち「結局誰もやらない領域」ができてしまい、それが失敗(逸脱)の原因になる。目前の仕事を“こなして”ただ時間を重ねても仕事の本質は解らない。常に仕事の全体像を把握する心構えが必要。人は実行(経験)したことしか、いざという時には実行できない。知識としての理解は繰り返しの行動を伴って身に付く。過去の失敗を活かすためには、「責任追及」ではなく「真の原因究明」を目指し、起きた失敗と向き合い、本当の再発防止につなげることがリスク管理の要点。

「本質安全」と「制御安全」という考え方、「本質安全」とはフェイルセーフともいわれ、もしも失敗、逸脱が起きても最悪の事態が回避できる仕組み、「制御安全」とはフルプルーフともいわれ、失敗、逸脱を防止する方法又はシステムでリスクを管理しようという仕組み。人は必ず失念、失敗を起こす。これらを想定内にした場合、組織のリスク管理の“ありがたい姿”が見えてこないか。